

大槌町の都市形成史にみる市街地と海の関係の変化 —大槌町の風景再生に向けた文化資源調査 その1

東日本大震災 被災地 都市形成史
復興計画 文化資源 まちづくり

正会員 ○田中 暁子* 同 窪田 亜矢**
同 岡村 祐*** 同 黒瀬 武史****
同 森 朋子***** 同 永瀬 節治*****

1. はじめに

2012 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災によって、大槌町では死者数・行方不明者は 1,256 人（被災者率 7.8%）、家屋被害は全壊・半壊 3,717 棟、一部損壊 161 棟（被災率 59.6%）という大きな被害を受けた。2011 年 5 月より浸水区域内の全壊・半壊の家屋の撤去が行われ、2011 年 12 月 26 日には町の復興計画が策定された⁽¹⁾。しかし、津波の被害を受けた土地には、町の歴史や地形によって育まれた大槌町独自の文化資源があったはずで、それを無視した復興はありえない。われわれ調査チーム⁽²⁾は、被災前の大槌町の文化資源の中でも、被災直後に風景再生の希望をもたらしたもの（祭事、湧水）と、それらを支えているもの（歴史、地形）に焦点をあてて調査をすすめた。本稿は、この一連の調査の中の、歴史、特に都市形成史について論じる⁽³⁾。

2. 大槌の集落の旧来の構造

江戸時代の大槌では、城山に大槌城が、それが廃された後は城山のふもとに代官所がつくられ、これらの近くの街道沿いに八日町と四日町が発展した。明治・大正時代に入ってから、江戸時代の代官所付近に町役場と小学校がつくられ、小鎚神社から江岸寺までの浜街道沿い、城山と大槌湾の間のわずかな平野の中でも城山のふもとの部分が市街地となっていた。

3. 過去の災害からの復興計画

3-1. 明治三陸地震津波（1896 年 6 月 15 日）

明治三陸地震津波で大槌に押し寄せた波高は、浪板・吉里吉里 10.7m、安渡 4.3m、大槌 2.7m とされている。町方では、津波によって大須賀の全部が破壊され、西は四日町の一部、北は御社地を襲い、江岸寺から松の下の一部まで水に浸ったという。その他の集落も大被害を受けている。町会では津浪復旧土木工事費 5,735 円が可決され、大槌浦海岸堤防工事などがおこなわれた。しかし、集落の位置などに大きな変化はなかったと考えられる。

3-2. 大森火事（1909 年 12 月 22 日）

大槌は限られた平地に密集して住み、海に近く風が強いために、大火にもたびたび襲われている。

向川原の大森一郎方より出た火が強風にあおられ、向川原から大須賀、七間町、寺小路、八日町に燃え広がり、311 戸が焼失した。県の調査員は、このような大火になった原因として、「家屋が密接して街巷をなしていたこと」、

「街路わずかに二間内外の巾員であったこと」という町の構造に起因するものも報告している。この火事の後に、大須賀、向川原の道路改良など、市街の改正を求める請願書が提出され、その一部が実現した。

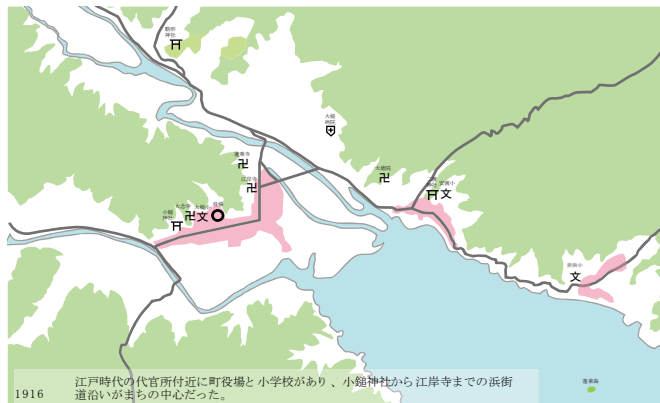


図1：大正期の大槌町の都市構造（1916 年地形図をベースに作成）

3-2. 昭和三陸大津波（1933 年 3 月 3 日）

内務省（1934）『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』によると、大槌の町方は、釜石、山田、大船渡と並んで、「都市的集落地」に分類され、その計画方針は、「原敷地に復興することを基本とし、その敷地内の土地利用を工夫し、海辺に直接面することを絶対的要件とする運送業、倉庫、その他の建築物を除き、住宅は後方安全なる高地に敷地を造成し移転せし」めることとされていた。大槌の町方では、大槌川右岸を整理し、ここから小鎚川左岸にいたる防浪堤を設けることによって、町方の市街地を挟む両河川を緩衝地帯として津波の被害を軽減すること、街路復旧事業として路線数 11、延長合計 1,367m、幅員 5.0m～11m が計画された。つまり、再び被災する可能性のある低地に町を再びつくるかわりに、威力を緩衝地帯で軽減した津波を防浪堤で受け止めること、防浪堤で受け止めきれず波が市街地に達してしまう時に逃げやすいように街路網を整備することが意図されており、現在の減災の考え方に近い意図で計画されていたと言えるだろう。このとき、旧浜街道を末広町で曲がらずに直進する現在の県道 231 号線に近い路線がすでに計画されている（図中①）。また、御社地を避けるように街路網が計画されている（図中②）。町方の市街地前面には、洲崎堤防がつくられた。大槌川と小鎚川の土砂が堆積して出来た中洲には、洲崎防潮林が造成された。小枕・惣川・

安渡（図中③）・吉里吉里では、住宅適地造成事業による高台への集団移転が行われた。



図 2：昭和三陸大津波後の復興計画（出典：内務大臣官房都市計画課（1934）『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』）

3-4. チリ地震津波（1960 年 5 月 24 日）

チリ地震津波が襲来した時、大槌町では、ワカメの口開けのために早朝に目を覚ました人が午前 2 時ごろに異様な波音と引き潮に気付き、町単独で津波警戒警報を出し、4 時 20 分には避難区域の避難を完了した。そのため大槌町では家屋、土木、農地、工業、商業、水産関係等の被害が甚大だったが、人的被害はほとんどなかった。

チリ地震津波後の津波防災対策の全国的な特徴は、防潮堤などの構造物が主体となったことである。大槌町では、水産庁関係で防潮堤（大槌町大槌：1,263m、吉里吉里：761.5m）、建設省関連で、大槌川で防潮堤 366.6m と河川堤 1,957.9m がつくられ、町方・安土地区では区画整理事業も行われた。この結果、町方の新町・大町と安渡の港町では、防潮堤と河川堤に沿ったところまで街区が整えられ、道路が通され、海のすぐ際まで市街化されることになった。

4. 市街地と海の関係の変化

4.1 大槌湾の埋め立てと開発

大槌湾における埋め立てと護岸整備は、戦前から行なわれていたが、大槌漁港修築工事（1948～）、漁港整備事業（1951～）によって急速に進んだ。これらによって、大槌川と小槌川の河口整理や安渡の埋立地、赤浜・安渡の岸壁などが実現した。

また、1964 年度には、洲崎海岸の国有地 10,100 坪を買収して、1967 年度までに同地区 2 万 9,400 坪を埋め立て「港町宅地造成事業」が行われた。『広報大槌』1965 年 9 月号は宅地分譲の予定を伝え「埋立地は津波対策防波堤に囲まれ、街路も立派なものとなりますし、将来は安渡、町方の中心街として発展が期待されます」としている。

4.2 低地部での町の発展

・公共施設の移転

江戸時代に代官所があった付近に町役場があったが、1953 年 11 月 21 日の火事の後、新町（東日本大震災被災時の位置）に鉄筋コンクリート造の庁舎がつくられた。

大槌病院は、山際から、大槌川右岸に面した現在地に移転し、1966 年 3 月に落成している。

・大町・新町への市街地の拡大

役場が低地に移転したことに加え、1960 年代には、チリ地震津波後の対策による防潮堤と河川堤の建設、災害復興土地地区画整理による町方の新町・大町地区における街路網の整備、末広町で L 字に曲がらずに直進し大槌大橋を経て安渡・吉里吉里へ抜ける国道 45 号線の開通。これらによって、以前は大槌川とその支流に囲まれた中州だった低地の市街化が急速に進んだと考えられる。

・大槌駅の南側の市街化

駅の南側の須賀町の一帯は、1960・70 年代にかけて市街化が進んだ。「シーサイド須賀エムエスタウン」など、近年でも須賀町の住宅分譲が行われていたようである。

4.3 川の沿岸の開発

大槌川・小槌川の沿岸の土地では、河川改修により川の氾濫の危険性が減少したこともあり、チリ地震津波後の住宅団地が設定されたところから住宅が建設されるようになった。1961 年には大槌町と富士製鉄株式会社釜石製鉄所が住宅敷地の売買契約を調印し、1962 年から大槌川、小槌川の沿岸の大ヶ口、祝田（現：桜木町）の農地を転用して、釜石製鉄所の従業員のための宅地として開発されることになった。これによって、1,000 戸の住宅団地が造成され、4,000 人の人口増がみこまれた。

5. まとめ

大槌町では、戦後、急速に人口が増加するにつれて、低地に市街地が広がった。その主な原因は以下のように整理できる。①役場や病院などの公共施設の低地への立地、②幹線道路の経路変化、③大槌川・小槌川の河川改修、河川堤防・防潮堤など構造物の建設。構造物への過信と水との接点の減少、④防波堤で守られた低地部における行政主導の宅地造成、⑤釜石などに通勤する都市住民の増加。また、都市形成史から重要な場所として、小槌神社から江岸寺にいたる旧浜街道沿い、昭和三陸大津波後の復興計画で潰されなかった御社地などが浮かび上がった。しかし、人々が被災直前の日々の生活の中で大切に思っていた場所を特定することも必要であろう。

【脚注】(1)岩手県大槌町（2011）『大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画』p.4、(2)文化庁「地域の文化遺産を活かした復興計画の策定」事業をうけた「大槌町における文化的景観構造の把握調査委員会」。メンバーは著者らの他に野原卓（横浜国立大学）、畠山拓也（大槌町）、(3)なお、大槌町の沿岸には、大槌湾沿いの集落と船越湾沿いの集落があるが、本稿では主に大槌湾沿岸の集落について述べる。

*後藤・安田記念東京都市研究所 研究員・博士（工学）
**東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授・博士（工学）
***首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域 助教・博士（工学）
****東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 助教
*****東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程
*****和歌山大学観光学部 講師・博士（工学）

* Researcher, The Tokyo Institute for Municipal Research, Dr. Eng.
** Assoc. Prof., Dept. of Urban Eng., School of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.
*** Assist. Prof., Dept. of Tourism Science., Tokyo Metropolitan Univ, Dr. Eng.
**** Assist. Prof., Dept. of Urban Eng., School of Eng., Univ. of Tokyo
***** Doctor Course, Dept. of Urban Eng., School of Eng., Univ. of Tokyo
***** Lecturer, Faculty of Tourism, Wakayama University, Dr. Eng.